

「実践事例集Vol.13」(2016年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

たのしいあそび みつけた

～主体的にあそびを展開する子どもの姿を追って～



社会福祉法人愛育福祉会

幼保連携型認定こども園 こばと保育園

1. はじめに

①保育活動の検討

当園は、今年4月から幼保連携型認定こども園として出発している。そこで、保育目標達成の為に、子どもの発達を次のように捉えてみた。

1. 技術活動の時（始まりの時代）

人は、色々なことを色々な方法で教えてもらったり、まねたりして、技術を獲得していく。この時期の技術とは、排せつの完了や食事のとり方など、生活する方法の獲得も技術といえる。次第に知的活動へと向かい、道具を使いこなしたり、遊ぶ方法を知ったりすることなども含め、「学ぶ時代」と捉える。

2. 課題活動の時（展開の時代）

身体活動や言語活動が巧みになり、人とのコミュニケーション能力も活発になってくると、色々な目的を持った課題活動への時代となってくる。この時期は、活動に参加するよう導くことが大切であると捉える。

3. 創造活動の時（発展の時代）

色々な課題活動を体験した子どもたちが自分で考えて工夫する活動を計画し、子ども達の姿を中心に捉え、子ども達との会話や対話の中で、季節や環境、行事等を考慮しながら活動環（当園の6つの活動環）を広げていくことが大切であると捉える。

以上の活動を、全年齢の中で、その年齢の時代に繰り返し繰り返し実践しながら、子どもの発達と家庭支援を行っていくことを職員間で認識し合っている。そこで今年は、「あそびきる」という環境作りを目標にした。

保育活動を展開するに辺り、保育士の立てた計画の中にありながら、その「大人の計画」の中で、さまざまな「偶然」を見出して夢中になる子どもの姿を想像し、保育活動計画を作成し、実践に至った。

事前の申し送り事項として、以下のことに留意した。

- ◆0歳から年長児までの全ての子どもたちが、材料を前にしてとる行動を「見守る」こと。
- ◆あそびの過程においては「教える」ことをせず、迷っていればその「迷い」を確認させ、子ども自身が解決策を見出せるように見守ること。
- ◆たくさんのコーナーを準備しているが、一箇所にとどまってあそびを続ける子どもがいれば、急がせず、満足するまでその場所で「あそびきる」ように見守ること。
- ◆主体は子どもであることを念頭におき、飽くまで探求する時間とすること。

こうした「科学する心」を育むであろう見守りの輪の中で、子ども達はたっぷりとあそびを展開できるようにと考えた。

「させる保育ではなく、してみたいという心を大切にする保育活動」は、効率的ではないかもしれないが、子どもたちにとっては真剣で、かけがえの無い「自由な時間」であると思われる。

②「科学する心」の捉え方

「科学する心」は自ら主体的に物事にに関わり、「してみたい」という欲求を満たす活動に熱中する中で育まれる「探求心、想像力、忍耐力、応用力」である。

例えば夏の時期になると、保育士は戸外での水を使ったあそびを思い切り展開したいと思う。そして保育士は、日々繰り返される保育活動も含めて「子ども達もそう思っているに違いない」と考え、工夫をこらして計画し、準備をしてきた。しかしそれは、保育士誘導型の活動であり、子どもが主体的に関わる活動ではなかったのではないか。今年は、日々の保育活動の中で「科学する心」を意識しながら、子ども達が主体的に関わる姿を見つめた実践を述べてみたい。

(中 略)

(中 略)

実践2 7月 年長クラス

「先生、地面がこわれてる！」～なぜだろうと考える子どもの姿～

長く続いた梅雨。園庭には大きな水たまりができた。
久しぶりに晴れた日の夕方、園庭の水はすっかり引いていた。
夕方、窓の外を見ていたY君が、驚いたように声をあげる。

「先生、地面がこわれてる！」

N君が外を見て、園庭を指差しながら一緒に声をあげた。

「本当だ！こわれてる。地震のせいかな？どうして壊れたのかな？」



彼らの声を聞いた女兒も窓から顔を出して園庭をのぞく。

壊れている状況を確認したいという彼らの要望により、「壊れている地面」を見に園庭に出る。

○地面を見ながら、

「われてる。でも下は大丈夫みたい。」

「草が生えているところは、われてないよ。」

「あっちにもあるよ。」と、園庭の中央に走っていく。

他と
比べる



○土がめくれ上がっている地面を触って、

「わっ！はがれるね。ほら、かたまりみたい。」

「でもほら、すぐこわれるよ。」

（指でくずしながら）さらさらの土になったよ。」

「風が吹いて、地面がめくれたんだね。」

触って
確かめる

自分の考え
を述べる



「こわれているところと、そうじゃないところがある。」

こわれているところをY君が教えてくれた。

①いちばんこわれているところ～園児用靴箱前の地面

②つぎにこわれているところ～ブランコの下の地面

③すこしだけこわれているところ～園庭中央の水はけ口部分の地面

こわれている部分を円で囲むY君



「どうしてここだけこわれているんだろうね。」と保育士が質問する。

Hさん「やわいから？」

N君「地震がおきた？」

Y君「葉っぱがたまっているところもある。葉っぱのせい？」

コンクリートの通路の縁を見つめていたRくん。「地面が見えるところの長さ…」

保育士が傍に落ちていた小枝をRくんに渡す。「これではかってみる？」

Rくんが棒切れを地面と接するコンクリート壁面の端に当てて、地面の高さを比べる。

道具を使って
確かめる

「棒と壁がぎりぎり
だよ！」
(同じ高さだった。)



「棒が出た！」
「さっきと長さ(高さ)
がちがう。」



保育士からの投げかけもあり、Rくんは棒きれで地面に接するコンクリート壁の高さをはかってみた。そして次のことを発見した。

確かめた結果、気づく

<R君の発見したこと>

①地面がこわれているところ = 棒と(コンクリートの)壁がぎりぎり
(つまり、棒とコンクリートの壁が同じ高さのところ)

②地面がこわれていないところ = 棒が飛び出したところ
(つまり、棒とコンクリートの壁の高さがちがうところ)

「高さが違うとどうなるの？」と保育士が質問する。「・・・？」返答に困ってしまったR君。「地面が低いところには何があったのかな？」と保育士が再度尋ね直してみる。

「水があったよ。」とH君。「そうだ、水たまりになってたところだよ。」と子ども達は口々に言い始める。「水があったところがこわれてるの？」と保育士が尋ねる。「そうだよ。」と子ども達。ここで、M君が叫んだ。「ブランコの下も地面がほげちよる！（穴があいている。）」だからこわれていたんだね、というところまでは言わなかったが、M君は地面が低くなって雨水がたまったところの地面だけが「こわれていた」と言いたかったのだろうと保育士は予想した。

Hさんが、割れて浮き上がっている土をそっとはがして積みあげ始めた。

「崩さんで、このままにしておこうよ。」「明日、見てみよう。」

その日の夕方、小さな地面の山は帰っていく子ども達の目にとまり、次々と踏みつぶされて崩された。翌日、「山、壊れてた。」とM君が教えてくれた。

「地面がこわれた」と称した事象は、連日の雨による水苔の作用によるひび割れ現象であり、大人には何でもない現象であるが、子どもの目は自然をきびしくみつめるものだと感じた。



実践3 7月～8月 年長クラス 「野菜の色ってこんな色？」

～今までは意識しなかったことへの驚きから、確かめ、気づく子どもの姿～

春に植えた畑の野菜（ピーマン、ナスビ、トマト）を収穫した。長雨で小ぶりの生長であったが、子どもたちは喜んで実を探し、もぎとって収穫した。

「こっちとこっちのトマトは、色がちがうね。」

ピーマンの濃い緑色、ナスビの光る紫色、少しずつ色合いの異なるミニトマト。同じ種類であっても、色味が異なることに興味を覚えた子どもたち。その色合いを絵の具で表わしてみようということになった。

保育士と一緒に収穫

「実が土に触れないようにするといいんだよ。」と声をかけながら収穫する。



「私もしてみたい！」と女兒2人でナスビの収穫を楽しむ。先生がやっていた通りに真似をする。「ナスビ落ちんように持ちよって。」

自分達だけで収穫したい！



収穫した野菜が大きな机に並べられた。「ピーマンがいいな。」「私はナスビがいい。」「なんでカボチャがあると？」（カボチャは職員が畑の隅でこっそり育てていたもの。）野菜を前に、子どもたちは野菜の名前を言い合う。野菜を手に取り、触ったり、においをかいだりする。

ものに働きかけて、確かめる

○野菜を触りながら、

HさんとRくんが手に持っていたピーマンを耳の近くで振っている。「何をしているの？」「あのね、中から音がするんだよ。」「カサカサって音が聞こえてくるんだよ。」ピーマンの種が動く音を聞いている。ピーマンを手にとっていた子どもが、それを見て真似をする。「本当だ…。」



ピーマンの音ができる。

○野菜を見ながら、

「カボチャの色はこの絵の具の色。」と黄色をとる。紙に絵の具をつけていたNくんが鼻を近づけている。「どう？」と尋ねると、「うん、カボチャの匂いがある。少しだけ。」と返ってきた。横でYくんが笑っている。



思わず鼻を近づける

野菜を切って、断面を見た。

包丁で野菜を切ると、「うわっ！野菜のにおいがした！」と一番前にいたHくんが叫ぶ。「本当だ。野菜の匂いだ！」と口々に言い始める。「匂わせて！」と後ろの子ども達と言う。

「中見せて！」と先生
にかけよるKくん。
「お～ナスビ！」と声
をあげる。周りも興
味津々で見つめる。



「トマトの匂い
～。」と言いな
がら、トマトの断面
を鼻に近づけるH
くん。



見て気づく・気づきを表現する

○野菜の断面を見て、色を選ぶ

トマトを見ながら、「この色だと思っ…」赤色を小スプーンにとって紙にこすりつけるMくん。その後、黄色をその上に重ねてこすりつけた。「だってね、いろんな色が混じってる。」最後に黄緑色を少しだけこすりつけた。



技法を知る
使って表現する

○デカルコマニーという技法を使って、

「絵の具をつけた紙をぺったんと重ねると、もう1つ絵があらわれます。」と保育士が声をかける。慎重に紙に絵の具をつけていたKさん。紺色、赤色、青色、少し黄色、濃緑色を次々に重ねていく。「先生、ぺったんしてみてもいい？」と保育士に声をかける。「一緒にやってみる？」「うん。」2人で紙をそっと重ね、絵の具をすりつける。「手の平でこうやってこするといいよ。」と保育士。紙をそっと開いてみる。「あっ！うつってたよ！」色がついたことを保育士に報告する。



デカルコマニーの技法を使って、野菜の断面を表現した子どもたち。野菜の匂いを嗅いだり、断面を手にとってつくづく眺めたりしながら絵の具を選び、色をつけていった。

その過程でトマトの汁が手についたKくん。「汁の色は赤くない。どうして？」と保育士に尋ねる。「どうしてだろうね。」と返すと、「いっぱいつぶしたら色が出るんじゃない？」と誰かが口にする。



そこで、「野菜の色を出す方法」をお家の人と一緒に考えてくることになった。

翌日、家の人と一緒に考えた答えを発表し合い、2つの予想としてまとめた。

予想① 野菜を火に入れて、焼けた状態でつぶして粉にして、筆で描いたら色がつく。

予想② 野菜をつぶして、溶かしたら色がつく。

これらの予想をもとに子ども達が出した考えは、「やっぱり野菜の色を出すには野菜をつぶすしかない」ということであった。では、「野菜をつぶす」にはどうしたらよいか。子どもたちは「手でつぶすことはできない。」と言う。そこで、「つぶす道具を探そう」ということになった。

○野菜がきちんとつぶれて、野菜の色が出せる道具を探そう

園庭あそびの中で、また、園周辺散歩の途中で、子ども達は「野菜をつぶす道具」を探した。

「かたいものじゃないとつぶれないよね。」

「とがっちょらんといかんかな？」

「何がいいっちゃるか？何にする？」

「いいものがあった！」と1人の子どもが言うと、「どこで見つけたのか」と問い詰め、互いを真似ながら探した。その中で、最初見つけていたものを棄てて新しいものを見つけたり、他の子どもが棄てたものを拾ったりして、彼らなりに「最適な道具」を探そうとした。そのうち、「かたいもの」「握りやすいもの」を探していく傾向となり、主に下記のような道具が集まった。

子ども達が見つけた道具

- ・自分のにぎりこぶし大の石
- ・手の平くらいの平らな石と細い木の棒
- ・丸っこい石
- ・カクカクザラザラの石
- ・大人の親指くらいの太さ（5cm程）の木2本

結果を予想しながら道具を選ぶ
互いに情報を交換し合う
他人のもの比べ、より良いもの
を探そうとする

つぶして色を出したい野菜

- ・トマト
- ・ナスビ
- ・ピーマン
- ・カボチャ

自分の道具を確認する

自分のできることを
予想する

つぶしたい野菜を畑で収穫し、野菜を選んだ。トレーの上で野菜をつぶした。

○トマトの色を出したい

考え、工夫しながら道具を使う

N君～道具：平らな石と木の棒

転がらないようにトマトを手でおさえ、真ん中にぎゅーっと石を押しつける。出た汁を舐めながらつぶす。「味見」とのこと。



Y君～道具：カクカクザラザラの石（大・小）

思いっきり石をトマトにたたきつけ、トマトがとんでいった。何度やってもトマトがとんで行った。とうとう床の上に新聞紙を敷き、その上に白い紙をおいて、トマト自体を紙の上にたたきつけて色をつけようと試みていた。ようやくトマトが割れて汁が紙についた。

○ピーマンの色を出したい

どうすれば結果ができるかを予想し
材料を足して試す

H君～道具：大きい石と小さい石

大きい石を土台にして、小さい石を使ってこまめに切り刻むようにしてつぶし始める。

ピーマンが切れ切れにつぶれて汁がにじみ始めると、おもちゃのトレイを持ってきて、そこに水を入れて切り刻んだピーマンを入れる。小さなスプーンでかき混ぜて色を出そうとする。

うっすらと水が薄緑色に変わったので、スプーンで水をすくい、紙につける。しかし、H君が思っていたような「グリーン」ではなかった。「薄い」とつぶやく。薄かったが、「色がついたような気がする」ということで、そのまま乾かそうということになった。翌日、茶色に変色しているのを見て、「かわいたね。へんな色になった。」と言う。



○ナスビの色を出したい

D君～道具：にぎりこぶし大の石と小さな石

「かたいへタの部分から色が出そう」と言って、かたいへタを石で削り取る。それをナスビのつるつるの表面にこすりつける。しばらくこすりつけていたが、なかなかつぶれない上に汁も出なかった。「皮がかたい」と言って、色を出すことを断念する。

カボチャが薄く切られていることを知り、ナスビも切って欲しいと言う。切られたナスビをつぶし、水を混ぜて色を出そうとした。



○カボチャの色を出したい

職員がつぶしやすいように薄く切ったカボチャの薄切りを渡す。

A君～平らな石とにぎりやすい小さめの石

平らな石の上にカボチャの黄色い部分をのせて、小さい石でたたきつぶす。すぐにつぶれる。つぶれたかけらをプリン容器に入れ、水を入れてかき混ぜて色を出そうとする。(Hくんが水を使っているのを見ていた。) 水は薄い黄色になる。その水に筆をつけて白い紙に塗ると薄い黄色がついた。それを見た他の子どもたちもプリンカップを欲しがった。自分の素材を細かくつぶしたものをプリンカップに入れ、水を入れてかき混ぜると色が出ると言って確かめる。水に薄く色がつくとても喜び、「出たね！」と言い合う。



自分に必要な道具を探し、使う
良いと思われることを真似し、試す

試した結果、気づく

<子ども達の発見したこと～まとめ～>

- ①つぶしてうまく色が出るのはトマト、ピーマン、カボチャだけである。
- ②ナスビは皮がかたくてダメ。切ったら少しは色が出るが、薄いし、ナスビの色じゃない。

翌日、登園した子ども達が前日に野菜の汁の色をつけた紙をのぞき込む。「乾いてる！」と期待するような声があがる。わくわくしながら紙を見た。茶色に変色しているものがほとんどであった。子ども達は予想していたような「野菜の色」が出ていないことに驚き、少し落胆した様子が見られた。それでも紙を隅々まで眺めている。誰かが、「これピーマンじゃない？」と紙を指差す。他の子ども達が「えっ？」とその子どもの指の先を見つめる。すると、他の子どもが「これトマトじゃない？」と持っている紙を見ながら言い始めた。見ると、茶色に変色している部分の端の方にうっすらと「緑色」や「オレンジ色」の隙線が確認できる。どうしても「野菜の色」を出したかった子ども達は、茶色に変色した中から「野菜の色」を見つけようとしているのだと感じた。

K君が紙を見ながら「ブドウなら出るんじゃない？」と言う。「そうだよ。野菜じゃなくて、果物がいいんじゃない？」と口々に言う。

成功しなかった野菜の色出しあそびを、いつの日か自分で試し活動することを期待したい。

(中 略)

実践6 8月 異年齢交流活動の中で

「夏のあそび」～体験したことを生かしながら、主体的にあそび子どもの姿～

今年の異年齢交流「夏のあそび」は、年長児や学童をコーナーの「せんせい」として配置し、それぞれの経験を生かして年下の子ども達を導きながらあそび要素を取り入れた。

○色水あそびコーナー

赤、青、黄の3色の色水を事前に準備し、色の組み合わせと色の変化を楽しむというコーナーである。小学生が担当し、年下の子ども達の様子を見守りながら一緒にあそんだ。

材料を組み合わせるあそび

4歳クラス Iくんのあそび



黄色に水色を入れる



再び黄色を加える

「みどり色をつくりたい」と言いながら、黄色と水色を選ぶ。

絵の具あそびやこれまでの色水あそびの経験から色の組み合わせを知っていたようである。

3歳クラス Kくんのあそび



赤色に水色を入れる



こんな色になった…

Iくんの隣にいたKくん、赤色をたくさん入れた後に水色を入れようとして、「まだ入るかな？」と心配そうであった。「あ～！こんな色になってしまった！」と色の変化に驚く。

その後「また赤を入れたらどうなるかな？」と言い、赤色をさらに加える。

「へんな色がいっぱいになってしまった…」とそのまま放置して、他のコーナーへ行く。



石鹸を入れてふると泡になる。「スムージー」は大人気。



見て先生！
泡はこぼれても混ざらないんだよ！

○スライムあそびコーナー

年長児がはりきって「せんせい」になったコーナー。「作ったことがある」「できる」という自信が年下の子ども達への支援につながる。「作り方の順番」を守り、最初は水のり！」と発言する。3歳、4歳の子ども達はその手元を見ている。「魔法の水は何杯にする？」と言うと、誰かが「最初は3杯だった。」と応える。

経験からの知識は自信をもって教えることができる。教え、手を差し伸べる余裕も生まれる。



年長児の作り方をみて、まなぶ。

触って感じる → 形づくる面白さ

○小麦粉粘土あそびコーナー

小麦粉の感触



さらさらしてる

水を加えてみよう



かたまりになった

水を入れ過ぎた！



べちょべちょ～

きれいに丸まったよ



パンみたいでしょ？



耳たぶみたい～



押したらのびる～



きれいなお団子



ロールパンー丁～

息を吐くかってすごい…体力がいるね

○水玉吹きあそびコーナー

シート上の水玉



これ動くの？

ストローで吹くよ



ふけふけ～！ふ～

チリ紙を染めよう



動いてくれ～



染め対決だ～！

季節に合わせ、子ども達が自ら考えながら試行錯誤して夢中になる複数のあそびの環境を構成した。子ども達は、自分の興味あるコーナーを選びながら、たっぷりと遊ぶ姿がみられた。

計画の段階で、子ども達の行動を予想し、子ども達が触れるものは事前に必ず試作、試行した。

しかし、子どもたちの想像力、探求心は保育士が予想しない活動を展開させることがある。「このコーナーでは、このあそびを展開して、この感覚をたくさん味わってほしい」と予想していても、予想とは全く異なるところに関心を示し、その子どもなりのあそびが展開していることもある。



園庭を広く使ったコーナー

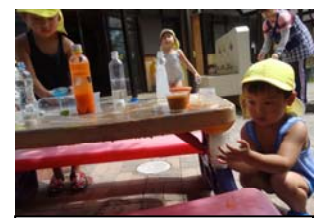


3歳児クラスのHくんのあそびの拡がり

夏のあそびの最中に、3歳児クラスのHくんが面白いことをしていると保育士がそっと教えてくれた。

Hくんは、色水あそびコーナーの机の端にしゃがみ、他の子ども達が机の上にこぼした色水の滴をプリン容器にためている。

誰かがたくさんこぼすと落ちる水量が増える。「お～！いっぱい落ちて



滴をためるHくん

きた！」と喜んでいる。しばらくして水量が減ると、机の上をのぞき、「ん～、小さくなったな…」とつぶやく。また誰かがこぼして水量が増えると、「お～！きたきた！いいぞいいぞ！」と喜ぶ。このHくんの行動をしばらく見守る。



お～、いっぱいきた～



あらっ、小さいよ…



おっ！いいぞ～



1番上のカップを外す

色水あそびコーナーには入れ替わりで子ども達がやってくる。机の上から滴り落ちる色水は尽きることがなく、Hくんは「あ～、忙しい」と言いながら滴を受け続ける。滴り落ちる滴の場所が少しずつ変化するのに合わせて、容器や体の位置を変え、少しでも多く集めようとしている。



他の子どもの足元で…



ジュースができたよ～



Rくんが横にくる



また1人になる

困ったことが起きても、自分で対処方法を考え、工夫する



最後の容器だな…
どうしよう。まだ欲しい



「あ～もったいない！」
と、手で受ける



ペットボトルを探し、
それで滴を受ける



口が小さい～なかなか
たまらないよ～



ぼくにもさせて！
うん、いいよ～。



できない…やっぱり
あっちであそぼう。



ぼくはがんばってみる
よ…たまれ～。

傍に来た子どもが去っても、Hくんは黙々と水をためる。ペットボトルには苦戦し、既にたまっているプリン容器の中身を他に移し、容器を空にして使った。

<Hくんの気づき>

- ①誰かが色水あそびのコーナーにきてくれると、水の勢いが「大きく」なるから嬉しい。
- ②ペットボトルは口が小さくて水を集めにくい。プリンカップの方が集めやすい。
- ③空き容器が無くなった時は、他の容器に少しずつ移して1つ空の容器をつくる。そうすることで、ぼくの「ジュース屋さんごっこ」は続けることができる。

ペットボトルに苦戦していたHくんであるが、プリンのカップもいっぱいになり、ペットボトルに再挑戦することにしたようである。ちょうどまくペットボトルを構えることができ、少しずつペットボトルに水がたまり始めた。



やった…たまったよ。



別の容器に移し入れる。



おっ、やっぱりたまる。



こんなにたまったよ。



「ジュース」が増える。



仲間も増え、賑やかに。



他の子が水を入れ足す



満員のジュース屋さん

協同してあそぶ中で、自分の「役割」を考えて行動する

4歳児クラスのAくんの関わり

Hくんがしていることに気づいた4歳児クラスのAくんは、自分が作った色水のうち1つを、机の上でそとこぼした。途端に机から落ちる水量が増えた為、Hくんが「お～！ありがたい！」と叫ぶ。その声を聞いたAくんは、机の上に置いてあった水が入っている容器を次々にこぼし始めた。「お～、たくさん落ちてくる。ありがとう。」とHくんが言う。

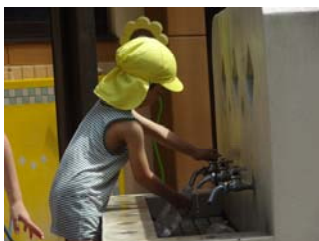
机の上の容器が全て空になると、Aくんはペットボトル容器を持って手洗い場へ向かった。Aくんは蛇口からペットボトルに水を汲むと机に戻り、汲んできた水を机の上の空になったプリン容器に入れた。そして、その水を再び机の上にこぼし、Hくんの「ありがたい～」の音が響く。

3回ほど同じことを繰り返すと、Aくんは水道から汲んできたペットボトルの水を、直接、机の上（Hくんに近い場所）にこぼし始めた。

Aくんの行動



容器の水をこぼす



水道で水を汲む



机の容器に水を入れる



直接机の上にこぼす

Aくんの加勢によって、一気にHくんの動きが忙しくなった。Aくんは手洗い場と机を行ったり来たりする。互いに無言で、時折、Hくんの「お～、すごい。」「あ～、忙しい。」という言葉が聞こえる。

ついにAくんがペットボトルを2本持ち、2本の水を勢いよく机の上に流した。もうプリンカッ

ブが全ていっぱいになっていたHくんは、咄嗟に「もったいない～」と言いながら、机の上に手を伸ばしてペットボトルのキャップをつかみ、それで水を受けた。



あ～、忙しい。



2本の水が流される。



思わずキャップで…



キャップの水も大切。



その場から離れない…

周りの子ども達が片付け始めても、Hくんは光る汗を浮かべてペットボトルのキャップで水を汲み続けた。

ついに年長クラスの子どもが容器を回収してしまった。水汲み道具を取り上げられても文句一つ言わなかったが、名残惜しそうにしばらくその場にとどまり、何も無くなってしまった机の上を眺めていた。



スライム作ったんだね…

同じクラスのWさんが手に袋を持っているのに気付いたHくんは、「ねえ、Wちゃん。その袋なあに？」と尋ねる。「これはスライムだよ。」とWさんが嬉しそうに答える。「えっ？スライム？どうして持ってるの？」とHくんは驚き、「すごいな～。見せて。ちょっと触らせて。」と袋の中のスライムに触らせてもらう。Hくんは色水あそびのコーナーから動かなかったため、他のコーナーでのあそびの内容を知らなかったのである。

3. 考察

①保育計画と子どもの活動の実際

保育士は、子どもが主体的にあそびを深められる様々なコーナーを配慮した。その中で、1つの場所で1つの事に没頭したHくんの姿があった。ひたすら水を集め続けるHくんの目は真剣で、その仕草はととても丁寧であった。周りの子どもたちが彼の傍に近寄ったり、去ったり、横に並んで同じことをしたりしても、彼は自分のあそびを続けた。周りの子ども達が、誰も道具を取り上げたり、邪魔したりしなかったことにも驚いた。周りの子ども達もまた、自分のあそびに夢中であったからであろう。

「さあ、次はこれをしましょう。」「こんなあそびかたをして楽しみましょう。」と保育士が誘導しなかったことも、Hくんが自分の時間を大切にできた要因であったかもしれない。しかし、培って欲しい力を念頭に計画する時、子ども達の自主性を尊重することは簡単ではない。「計画通りにいかない」ことも多い。寧ろ、「計画通りにいく」ことを目指すべきではないのかもしれない。その意味では、保育計画や活動に際しての環境づくりはいかなるものであるべきかを再認識することができた。

②実践からみえた「科学の心」を育むためのポイント

- ①子どもの声に耳を傾け、可能な限り時間をつくり、「モノとの対話」をじっくりと実現させる。
- ②子どもの行動が「観察→実験→検証→気づき」へと繋がるように必要な支援をしながら見守る。
- ③結果や気づきを急がせない。また、大人の知っている「知識」へと無理に結びつけない。
- ④例えば、「予測」→「試行」→「再考」→「再試行」のように、長く時間をかけた活動を行う。
- ⑤子どもが知らない技法、道具は必要な限り示し、子どもの創造性を喚起する。
- ⑥試行錯誤する時間をたっぷりと確保し、試した「結果」を丁寧に確認させる。
- ⑦家庭を巻き込みながら子どもの活動の拡がり確立する。
- ⑧真似をすることを容認する。真似をすることもその子どもなりの試行錯誤の過程である。
- ⑨予想とは異なる状況が発生し、途中で活動を断念しようとしてもできるだけ誘導せずに見守る。
- ⑩予想とは異なる結果が出ても、子ども達自身が彼らの「発見」を見出すまで口出しせず見守る。

(後 略)